
夜桜

たかみゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜桜

【Nコード】

N0792F

【作者名】

たかみゆう

【あらすじ】

花見をするために公園へ連れられてきた少年の、幻想めいた出会いの話。

(前書き)

あまり『BL』、『BL』はしていません。

いくつもの提灯が闇を照らし、桜の白い花弁を浮き上がらせている。頭上での美しさに対抗するように、地上では賑やかに繰り広げられる宴。

少年は、父親に連れられてこの場を訪れていた。

足元の青いビニールシート。先に準備していた母親達が、各々

(オノオノ)の腕を振るった料理が華やかな彩りを添えている。他家の者も続々(ゾクゾク)と顔を見せていた。

各々(オノオノ)が靴を脱ぎ、シートの上に座っていく中、大人達は久々(ヒサビサ)の顔合わせに、かなり盛り上がっているが、少年にとってはおもしろくない。彼はおもむろに立ち上がり、靴を履く。

それに気付いた彼の父が、酔いのまわりかけた明朗な声で呼び掛けた。

「遠くには行くなよ！」

少年は片手で応えると、公園の奥、人気の少ない方へと足を向けた。

昼間は一人でよく訪れるこの公園も、夜は全く違う趣を醸し出している。少年は電灯も少なく、人気の全くない、小さな広場になつて居る場所にたどり着くと、小さな溜息を吐いた。

彼は一人で頭上を見上げると、久々(ヒサビサ)に恋人と逢ったかのような微笑みを浮かべ、ひとりごちる。

「静かだな」

桜は応えるように、ひらひらと華を散らした。

白い花弁が辺りを舞う中、肌寒さを感じながらも、うつらうつらと舟を漕ぐ彼は、どこか遠くに邪気の無い高い声を聞き、はっと顔を上げる。

見覚えの無い、同世代の子供の姿が、その目に映った。
自分の聖域を侵されたような感覚。少年は微かな怒りに眉を寄せて立ち上がる。

無言で歩み寄る少年の気配に気付き、桜を注視していた子供は、体ごと顔を少年に向ける。黒目がちの大きな瞳に鋭い視線を向けたまま、少年は立ち止まった。

子供は小首を傾げ、少しだけ自分より背の高い少年を、あどけない目で見つめ、口を開く。

「こんばんは！」

少年は相手の不意打ちに似た挨拶に、驚き、目を白黒させる。

彼は上背があるうえに、かなりの暴れ者だった為、同年輩からは避けられていたのである。その為、相手から話し掛けられたのは、これが初めてだった。

「こん……ばんは」

驚きのあまり、詰まりながら挨拶を返す少年に向き合ったまま、子供は口許に笑みを浮かべ明るく名乗る。

「僕、怜っていうんだ」

少年は頭の中でぐるぐると考えを廻らせ、返す言葉に悩んだが、無下に扱って鬱陶しい状態に陥ることを恐れ、怖ず怖ずと呟くように名乗った。

「俺は、頼」

怜は、困ったように頭を掻く頼に向かって、そのつぶらな瞳を弓形に細める。

「此処の桜、綺麗だねえ」

自分の好きな光景への賛辞に、頼は嬉しさを覚えて、思わず笑みを零し、声を弾ませる。

「だろ？俺、この公園で此処が一番好きなんだ！」

怜はニコニコと微笑みを浮かべたまま、その広場で最も枝振りがよく、幹の太い樹に向かって歩き出す。なぜか離れたくないとい

う感情を抱いた頼は彼の数歩後を、追うように歩く。

堂々（ドウドウ）と枝を張り、すつくと背筋を伸ばして、無数の華を咲かせている桜。その前で怜は振り返り、頼に視線を向ける。

「この桜、吸い込まれそうな程、綺麗」

頼は怜の視線と声から不安を嗅ぎ取り、口許を歪める。

「怖いなんて、言うんじゃないだろうな？」

頼が揶揄うと、怜は素直に頷いて、再び桜を見上げる。華はは

らはらと二人の上に降り落ちて、地面に白い絨毯を敷いていく。

「凄く綺麗だけど、少し怖い」

怜の呟きに呼応して少し風が強まったように感じ、頼は思わず後退りしてしまう。目の前に佇んでいる相手が、地面か、桜に飲ま

れて消える光景が脳裏に浮かび、頼は思わず怜に駆け寄ると、その

肩を掴んでいた。

軽い眩暈に瞳を閉じた頼の耳に、怜の声が近く聞こえる。

「どうしたの？」

頼ははつと目を開けると、慌てて怜の身体を離し、その場から跳び退いて乾いた笑いを漏らす。

「何でもねえよ」

頼が強がった台詞を吐くと、怜は体ごと振り返り、首を傾げて訝る。

それを見て、頼は慌てて空を見上げ、嘯く。

「あー、俺、戻らねえと……」

背を向け、駆け出した頼を視線で追いながら、怜は、我知らず微笑みを浮かべていた。

「僕も、そろそろ帰った方がいいかな？」

目を弓形に細め、怜は、頼が走り去った方向とは反対側へと足を向けた。

桜（桜）はただ、静かに華を散らし、その場に佇む。

それから数日後、新学期の教室で二人は再会したのだが……。

「新しいお友達の、如月怜君です」

頼はホツとしたような、少し残念なような微妙な気分に見舞われ、丸一日を難しい顔のまま過ごしたのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0792f/>

夜桜

2010年10月8日14時41分発行